



Title	芒亭書屋談叢
Author(s)	芒亭
Citation	各務時報, 88
Issue Date	1935-12-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77676
Type	article
File Information	A018_02_03all_Part24.pdf





(清く明くくる)

芒亭書屋談叢

「日本人の愛好する菊はこんな菊では無い筈だが、そんな事を考へたりした。」

「清楚な日本風の座敷には、こんなダリヤの様な艶麗な菊はどうかふさはしくない。シヤンデリヤの輝く下に強い色調の絨毯の上にでも置いたならうづるかも知れぬが日本人の室には寧ろ野菊の様な菊こそふさはしい、」などと考へた。此頃徹庵の爲四五日床に就いて居た頃、二鉢の菊の花を眺め入りながら、あれやこれや想ひに耽つて居た時の事である。

「雅籟醉狂集」に「近世この花はやり新花を作り出し、菊合せの會をしける、云々」とあるから、享保の頃から菊の所謂新花は創り出され始めたのであらうと云はれて居る。

だが靜かに凝視する事を好む日本人の心には珍奇な形容や餘り浮華な色調は心から愛慕される筈はないと思ふ。そんなものはすぐに飽きが来るからである。深く眺め入るに値するものは、飽きないもので寧ろ凡庸なものに近いであらう。

西洋人は花を亂用して居る様である。深く眺め入る態度が餘り無い様であるから、珍奇を好み強い刺激をのみ愛する爲であらうか。日本に於いても菊の花のみは亂用されて居る傾きがある。所謂新花が早くから出来始めたからであらう。然し其は眞に花を愛する所以ではない、花に現はれた人の巧みを競つて居るのみではないのか。バイロンの「チロンの牢獄」と云ふ詩に、獄窓の軒近くに自然に生え出た一本の小さな名もない雑草の花を日毎に飽かず眺め入つて慰みとした殉教の囚人の話を讀んで、深く心を打たれた事がある。其おごらぬ心の様が慕はしいのである。

將軍頼朝に見參して天下の半分の莊園を與へられんと望んで居た程の豪者佐々木四郎高綱の眼中には、只一人の百姓の命など問題ではなかつたかも知れぬ。或る戯曲には、高綱に殺された百姓の子等の心と天下の綱の心を、二つならべて讀者の眼の前に示してある。天下の半分を得そこなつた高綱の歎きと父を奪はれた百姓の子等の歎きと、何れが貴しと云ひ得るかと讀者の心に訴へて居る様である。

野菊を見入る心には、どんな小さな生命をも尊重せんとするやさしい心と共に、どんな威權をも徒らには恐れない勇猛心が意味されて居る。

子供等が、手折して捨てし 葉鶏頭
靜かに暮るゝ 秋の庭かな

(芒亭)